

# G SJ Newsletter

G S J ニ ュ ー ス レ タ ー No. 24 2006/9

## Contents

第2回  
京都大学ー地質調査総合センター連絡会の  
開催報告

地質標本館平成18年度夏のイベント  
・体験学習「砂と遊ぼう！」  
・体験学習「化石のクリーニング体験」  
・地球何でも相談

第3回 CCOP 火山災害軽減のための野外  
ワークショップ

第17回国際堆積学会議 (ISC 2006)  
ブース出展報告

地質地盤情報協議会  
第2回意見交換会の開催

地学団体研究会つくば総会の報告

活断層データベース大幅改訂

地質調査総合センターシンポジウムのお知らせ

新人紹介

スケジュール

編集後記

## 第2回 京都大学ー地質調査総合センター連絡会の 開催報告

佐脇 貴幸 (地質調査情報センター)

2006年8月31日、産総研臨海副都心センターにて、地質調査総合センター(GSJ)と京都大学工学部との間での第2回連絡会が開催されました。本連絡会の趣旨は、地下資源環境に関する物理探査研究を行っている京都大学工学研究科ジオフィジックス分野・地質工学分野と、我が国の国土・周辺海域の地質調査を行っているGSJの間で、研究交流・意見交換を行うことを目的とするものです。今回は特に、エネルギー・資源の市場価格高騰に関連して、近く整備される三次元物理探査船によりどのような調査を行うべきか、また、実用化研究が期待される地中熱利用推進など、共通する研究課題における協力の道を探ることを主眼として議論が行われました。

GSJ側は地圏資源環境研究部門を中心として、地質情報研究部門、地質調査情報センターから関係者が参加しました。当日は、佃GSJ代表の挨拶及び京都大学芦田教授の挨拶と最近の物理探査研究の動向、地圏資源環境研究部門瀬戸部門長による部門の研究の概要説明に引き続き、個別の研究課題の紹介がありました。GSJ側からは、3D物理探査と資源ポテンシャル評価、沿岸域における物理探査法、CO<sub>2</sub>地中貯留、地中熱、メタンハイドレート、沖縄周辺海域調査計画、大陸棚画定作業に関する研究内容の紹介がありました。一方京都大学側からは、浅層部複合電磁探査システム、地盤振動シミュレーション、数値シミュレーション手法による非破壊岩石実験手法、地下構造の把握技術、メタンハイドレート、CO<sub>2</sub>地中貯留、核磁気共鳴検層に関する研究内容が紹介されました。

当初の予定時間を1時間近く超過するほど熱心に意見が交換され、本連絡会を通して地下探査・資源探査等について両者間の最新の研究内容に関する相互理解を得ることができました。また、今後は、両機関が上記の研究に関する中核となって、本連絡会の活動を他大学にも広く展開して、研究交流と情報交換を行うことが必要であるという理解が得られました。



連絡会冒頭に挨拶する佃GSJ代表。

# 地質標本館平成 18 年度夏のイベント

利光 誠一（地質情報研究部門）・谷田部 信郎（地質標本館）

地質標本館では、小・中学校などの夏休みに合わせて体験学習会をイベントとして企画しています。2006年も7月22日の産総研一般公開（GSJ ニュースレター No.23 参照）以降、8月19日に「砂と遊ぼう!」、8月25日に「化石のクリーニング体験」、8月26日に「地球何でも相談」の3つのイベントを開催しました。ここでは、地質標本館の8月のイベント（体験学習会）について報告します。

写真：この夏の地質標本館特別展のテーマ「砂」にちなんだ子どもたちに最も人気のコーナー「砂と遊ぼう!」の様子（8月19日）。地質標本館多目的室に臨時的砂場を設置して行われた。



## 体験学習「砂と遊ぼう!」

目代 邦康・清水 徹（地質標本館）・中澤 努（地質情報研究部門）

8月19日（土）に地質標本館の夏休みイベントとして、体験学習「砂と遊ぼう!」が開催されました。このイベントは、7月22日から始まった地質標本館特別展「美しい砂の世界—不思議な砂・美しい砂・役に立つ砂—」の一環として行った体験学習会です。8月19日には、屋内イベントとして地質標本館多目的室で「砂変幻（すなへんげ）」、「伊豆諸島新島産の白砂の砂場で砂変幻の体験学習」、「手づくりの砂時計」、「エジプトの不思議：オベリスクとピラミッドの扉」、「世界の砂・日本の砂—有田コレクション—」を、地質標本館ホールで「鳴り砂を鳴らそう」、「ペットボトルを使った地盤の液状化実験—エキゾッカーとエッキー—」を行いました。さらに屋外イベントとして、山から海までの砂礫と水の動きを、水槽などを使って再現した「1. 山から川へ：岩石の風化・侵食・運搬」、「2. 川から海へ：三角州の形成実験」、「3. 海岸：ウェーブリップルの形成実験」、「4. 海：沈降管を使った土砂などの沈降実験」、「5. 火山の山体崩壊による津波の再現」を行いました。このうち、ほとんどの実験は7月22日の産総研一般公開日に行った体験学習と同じですが、屋外イベントとして行った「1. 山から川へ：岩石の風化・侵食・運搬」は今回、初企画となったものです。これは、青木正博地質標本館長が温めてきた企画で、川の源流部分で起こっている岩石の風化、侵食、そして碎屑物となった岩石の運搬、さらには川の中～下流で砂粒などが堆積する様子を再現した実験です。川の最上流に砂で山を作ります。ここには水晶の鉱脈があるという設定で、水晶の結晶が混入されています。砂の中には石英・長石粒子のほか、砂鉄も混ぜておきます。この（砂）山に水をかけることで、流水によって土砂が川を

流れ下るという設定です。流れた土砂は、実験装置の扇状地や、蛇行河川、三角州などに堆積していきます。水晶は上流の鉱脈から流れてきて下流側に堆積しますが、これにより、下流にある岩石が上流の地質を反映しているということを学ばせるとともに、流水中の礫の挙動を見ることが出来ます。また、砂鉄を混ぜることで、比重による砂粒の挙動の違いも学ぶことができます。この実験水路は、地質標本館の大和田朗、佐藤卓見の両氏が青木館長の意を汲みながら作製したものです。水路装置の外側にも花崗岩や石英鉱脈の写真を貼るなど、外見にもこだわった仕上がりとなっています。当日は暑い日差しの中でしたが、実験水路装置のまわりにはたくさん子どもたちが群がり、企画・製作に携わった青木館長、大和田・佐藤両氏も汗を拭き拭き、子どもたちに説明を繰



写真：「山から川へ」の水路実験装置での実演の様子。川の源流から岩石の風化、土砂の侵食・運搬、下流部での堆積といった一連の碎屑物の粒子の動きが見えるように工夫されている。

り返していました。

上述のように盛りだくさんの体験学習が一同に揃い、大勢の来館者でにぎわいましたが、今回は生活の中でも身近な存在である「砂」を素材にただけに、子どもたちだけでなく、大人にも大人気でした。特に、多目的室に特設した新島産の白砂の“砂場”は、理屈なしで子どもたちの遊び場になったようです。近年、諸事情から公園の砂場で子どもたちが遊ぶことがあまりなくなると聞きますが、残念なことだと思います。

この日のイベントには、地質標本館スタッフに加え、地質情報研究部門からもスタッフが参加しました。子どもたちへの直接指導の多くは、博物館の実務の研修に来ている博物館実習生 12 名があたりました。また、地質調査所 OB の有田正史氏が特別参加し、「砂変幻」などの指導にあたり、話術の巧妙さと熱心な指導で子どもたちの心をとらえていました。

## 体験学習「化石のクリーニング体験」

辻野 匠・兼子 尚知（地質情報研究部門）

8月25日（金）に地質標本館の多目的展示室で、恒例となった夏休み体験学習「化石のクリーニング体験」が開催されました。栃木県那須塩原市の塩原層群（約30万年前の湖成層）から切り出した岩石（頁岩）をハンマーとタガネで割り、きれいな木の葉の化石を取り出して、その葉の名前を決める（鑑定）までの一連の作業を体験するこの体験学習は、子どもたちにとって人気のイベントです。

毎年、この体験学習では、博物館実習で博物館活動の実務訓練をしている大学生が子どもたちの指導にあたります。このため、前日には、博物館実習生も実際に岩石をハンマーとタガネで割り、化石を取り出す実務を受講しました。今回参加した博物館実習生も実際に化石のクリーニングをした経験はほとんどなく、翌日の指導を見据えて真剣な眼差しで練習に取り組んでいました。

イベント当日には、地質標本館のOBで、塩原層群の植物化石を長年研究されてきた尾上 亨さんと協力者の計4名の特別講師を迎え、博物館実習生の指導のもとに子どもたちが自分の手で取り出した化石について、鑑定の指導をしながら化石についての様々なことを解説していただきました。このイベントに73名の参加者が挑戦し、それぞれに木の葉の化石を取り出して、驚きと喜



写真：化石クリーニングの様子。博物館実習生の指導のもと、タガネとハンマーで岩石から化石を取り出します。

びの表情を浮かべていました。塩原の木の葉化石は30万年前のものですが、葉そのものは今も野山に生えている木々のものとほとんど変わらないため、参加者には親しみやすいものと思います。このイベントを通して、自分の住んでいる場所のまわりの自然にも親しみを増していただけるようであれば、イベントを企画した私たちとしてもうれしいところです。

## 地球何でも相談

坂野 靖行・中島 礼（地質情報研究部門）・奥山 康子（地圏資源環境研究部門）

8月26日（土）には地質標本館ホールで「地球何でも相談」が開催されました。これは夏休みに採集した岩石・鉱物・化石などの標本の鑑定を指導することで、小中学生に夏休みの自由研究などのお手伝いをしてあげようということで始まったイベントです。

例年、旅先で採集した標本や自由研究のためにわざわざ出かけて採集してきた標本など、いろいろな標本が

持ち込まれますが、今年は天候のすぐれなかったこともあり、全体でのべ14件の相談にとどまりました。しかし、わざわざ石川県の能登の貝化石を採集してきた小学生や、秩父の荒川の石（結晶片岩、砂岩、チャートなど）を50個ほど持ち込んだ小学生もいて、熱心な子どもの相談に、対応にあたった地質標本館、地質情報研究部門、地圏資源環境研究部門の研究者も真剣な表情で対応して

いました。

この日は、地球何でも相談と並行して、地質標本館に博物館実習で訪れている大学生が「恐竜折り紙」や「新島産白砂で遊ぼう」などのサブイベントで来館した子どもたちに対応しました。「恐竜折り紙」は地質標本館でもここ数年続けているサブイベントですが、全国的にも恐竜ブームのためか、人気のイベントとなっているようです。小さな子どもには折り方の難しいところもあるようですが、博物館実習生の指導のもとに皆上手に恐竜を折り上げて、記念に持ち帰りました。「新島産白砂で遊ぼう」では、「砂変幻」の原理を教えるために地質調査所OBの有田正史氏が作製した穴のあいたプラスチック皿を使って、砂が穴から滑り落ちる際の砂の動きを観察していただきました。また、ペットボトルを利用した手づくりの砂時計を作製するためのキットを配布したとこ



写真：地球何でも相談の様子。子どもたちのとってきた岩石や化石の鑑定をして夏休みの宿題のお手伝いになればと、スタッフの対応にも熱がこもります。

ろ、夏休みの宿題にしようと喜んで持ち帰る子どもたちもいました。

### 第3回 CCOP 火山災害軽減のための野外ワークショップ

高田 亮（地質調査情報センター）・浦井 稔・下司 信夫・鬼沢 真也（地質情報研究部門）

若手の研究者を中心に、相互に噴火体験の情報を交換して交流を深め、アジア太平洋諸国で互いに噴火経験を共有化するために、CCOP 火山災害軽減のための野外ワークショップを2004～2007年の期間、毎年開催している。第1回は、2004年12月に産総研が中心となり日本で開催した<sup>1)2)</sup>。第2回は、インドネシア火山地質災害防災局が現地組織者となり、2005年9月に、メラピ火山のお膝元であるジョグジャカルタで開かれた<sup>3)</sup>。第3回は、名称が変更された上記研究組織であるインドネシア火山地質災害防災センター（CVGHM）が現地組織者となり、インドネシアのバンドンで2006年8月29日から9月3日まで開催された。インドネシアから約30名、フィリピンから2名、日本から5名、CCOP事務局から1名の合計約40名が参加した。

8月30日には、インドネシア地質局長とCVGHM所長の挨拶から始まる厳粛な式典が行われ、本ワークショップの重要度が認識された。メラピ火山が活動中のジョグジャカルタの支所からも幹部が出席した。30日と31日午前の発表会では、CVGHMから、メラピ火山における2006年噴火の活動報告と初期における警報伝達の有用性について、カラングタン火山における2006年噴火活動と地球物理観測、ハザードアセスメントの発表があった。また、イジェン火口周辺の地下水汚染の地球化学観測とバンドン北方のスダカルデラ形成に伴うプリニアン噴火についての報告があった。フィリピン地震火山研究所から、カントリーレポートとマヨン火山の

2006年の最新の火山活動が報告された。地質調査総合センターからは、鬼沢真也が、有珠火山2000年噴火の例をもとに、地下構造がマグマの動きに及ぼす影響を、下司信夫が、カルデラ形成を伴う三宅島2000年の噴火活動を、浦井 稔が、ASTERによる熱観測例とALOSによる観測概要を報告した。電力中央研究所から、土志田潔氏が火口の移動の意義を発表した。アジア航測がインドネシアの赤色マップをポスターで発表した。最後に、アジア諸国への貢献について、CCOP事務局と議論した。

野外巡検は8月31日午後～9月3日に行われた。8月31日午後は、有史に山体崩壊をおこしているパパンダヤン火山を訪れ、2004年噴火の火口と堆積物を見学



写真1：アナクラカウ火山の登山途中での記念撮影。周辺には2002年噴火の噴出物が表面に見られる。

した。火山ガス採取のデモが行われた。夕方、近年、地震が急増し緊張が高まったグントール火山の観測所を訪問し、観測体制と最近の状況の説明を受け、夜8時まで議論した。9月2日は、1883年にカルデラ形成を伴う大噴火をし、発生した津波により、3万6000人の犠牲が出た、クラカタウ火山を訪れた。今回のメインイベントである。カルデラ形成後、現在活動中のアナクラカタウ火山にボートで上陸し、山頂火口で最近の火山活動を議論した(写真1)。午後には、クラカタウの外輪であるラカタ火山に残るカルデラ壁で、成層火山の断面を観察した。9月3日には、ジャワ西海岸沿いで津波の痕跡として残る、崩壊した煉瓦できていた灯台跡を見学した(写真2)。この遺跡を説明した立看板がないのは残念であった。ジャワとスマトラで、最大で35mの高さの津波が来たと言われている。

第3回は、セレモニーを大事にするインドネシアらしい会議の進行であった。要旨集と巡検ガイドブックが当日準備されていた。巡検出発前には、発表のパワーポイントファイルと写真がコピーされたCD-ROMと、本ワークショップのオリジナルTシャツが、参加者に配布された。今回は、CCOP事務局が参加し、会計などが円滑に進んだ。来年の第4回は、フィリピンで開催される予定である。これまでの本ワークショップの成果のとりまとめも行う予定である。

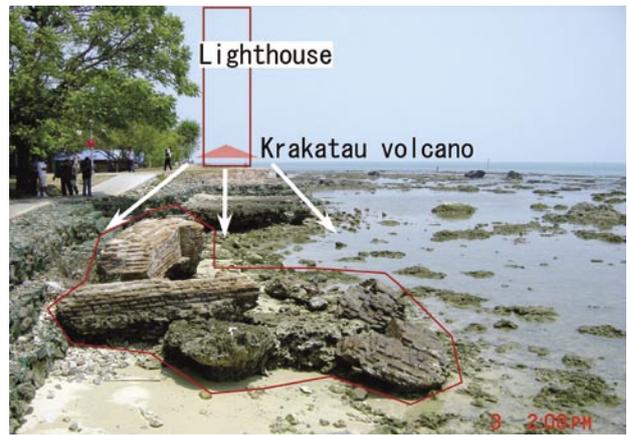


写真2: ジャワ西海岸のアンヤールで、津波で崩壊した灯台跡を見学している参加者(写真の左側)。灯台は高さ約40mあったと言われている。クラカタウ火山から約50kmの距離である。津波は写真の奥の方向から、手前に向かってやってきた。

関連 HP:

<http://staff.aist.go.jp/a-takada/ccopworkshop-e.html>  
引用

- 1) GSJ Newsletter, No. 4, 2005/1, 9-10
- 2) 地質ニュース, 608,21-27
- 3) GSJ Newsletter, No. 13, 2005/10, 6-7

## 第17回国際堆積学会議 (ISC2006) ブース出展報告

渡辺 真人 (地質情報研究部門)・宝田 晋治 (地質調査情報センター)

国際堆積学会議は国際堆積学協会が中心となって4年に一度開催する国際会議で、2006年8月28日から9月1日にかけて東アジアで初めて福岡国際会議場で開催された。地質調査総合センターの存在を各国からの参加者にアピールするために、7月に行われた国際鉱物学連合総会に続いてブースの出展を行った。

まず、会議に先立ち27日に行われた市民向けの講演会「繰り返される大地震と大津波」(産総研からは佐竹氏が講演)において、会場で産総研の警固断層の調査結果をポスターで展示した。講演会は定員400名の会場が7~8割方埋まる盛況で、GSJのポスターにも多数の人が集まり、様々な質問が寄せられた。

28日からは講演会会場と同じフロアにある展示会場のブースにおいて、GSJの展示を行った。GSJの組織と各部門の紹介のポスターとともに、シームレス地質図と警固断層のトレンチ調査に関するポスターを展示した。また、3台のノートパソコンでRIO-DB、シームレス地

質図、CD-ROM版の地質図をデモした。警固断層のポスターは地震の全くない国から来た参加者の興味を引き、大都市周辺の地下に活断層がある日本の状況に驚く



写真1: 警固断層ポスター前に集まって、説明を聞く人々。

人もいた。RIO-DB とシームレス地質図のデモも好評であった。

ブースにおいて 200 万分の 1 日本地質図を掲示して地質図を販売した。海外の参加者からの関心は高く、200 万分の 1 日本地質図、100 万分の 1 日本地質図 CD-ROM、雲仙火山地質図、阿蘇火山地質図、富士火山地質図、火山の絵はがきなどに関心が集まった。5 日間の会期中に、地質図と CD があわせて 68 枚、絵はがきが 55 組売れた。

また、隣接する IUGS の国際惑星地球年 (IYPE) に関するブースの展示を、IUGS から依頼されて併せて担当した。IUGS のブースでは、IYPE に関する論文の載った Episode 誌、IYPE に関するパンフレット、2008 年ノルウェーで行われる IGC の First Circular 等を配付し、多くの人に立ち寄って頂いた。IUGS からは President の Zhang Hongren 氏が参加されており、地質調査総合センターのサポートに感謝の意を表して下さった。

展示会場では、ブラジルの石油会社 PETROBRAS のブースがその規模と派手なデモンストレーションで目立っていた。日本からは海洋研究開発機構 (JAMSTEC) が中心となって出展した IODP のブースや、石油会社など地質関連の企業のブースがあった。地質調査総合セン



写真 2: ブース展示の様子。

ターのブースは、それらのブースよりも (ひいき目かもしれないが) 訪問者が多く、また地質図などの成果物や研究紹介のポスターに対する関心も高く、参加者に地質調査総合センターの活動をアピールできたものと思う。最後に、ポスター作成に協力して頂いた方々、会場で設営・説明・撤収をお手伝い頂いた方々に感謝する。

## 地質地盤情報協議会第 2 回意見交換会の開催

佐藤 努 (地質調査情報センター)

2006 年 7 月 31 日に産総研丸の内サイト会議室にて、地質地盤情報協議会の第 2 回意見交換会が開催されました。この会は、7 月 5 日に行われた第 1 回意見交換会に引き続き行われたもので、今年度発足した地質地盤情報協議会が主催しています。第 1 回意見交換会の様子や意見交換会開催の経緯などについては、GSJ ニュースレター No.22 をご参照下さい。

第 1 回意見交換会では主に海外の事例を扱いましたが、第 2 回意見交換会では主に国内におけるボーリングデータの整備や公開について、3 名の方に講演していただきました。参加者は 34 名で、内訳は政府関係 (内閣府、文部科学省、経済産業省) からの招待者が 5 名、講演者などその他の招待者が 5 名、当協議会からの参加者が 20 名、自治体関係者が 4 名 (当協議会の 2 名を加えると計 6 名) でした。

講演は、まず杉並区の大谷康郎氏より、「区役所におけるボーリングデータの取り扱いについて」と題して、杉並区が管理する約 6,000 本のボーリングデータについて紹介がありました。これらのデータのほとんどは、

建築基準法による建築確認のために区役所へ提出された資料のため、本来その他の目的には使用することができません。しかし、1995 年の兵庫県南部地震を境にして住民の地盤情報に対する関心が高まったことと、区には地質地盤に関する情報が他に乏しいことから、問い合わせの際には職員が窓口でこれらの資料を見ながら対応し



写真: 意見交換会の様子。

ているそうです。最近では、マンションの安全性や地下水に関する問い合わせも増えており、このような地盤情報の公開とその方法が課題となっているそうです。

続いて、(独)防災科学技術研究所の藤原広行氏より、「統合化地下構造データベース(DB)の構築について」の講演がありました。本DBは、平成18年度科学技術振興調整費によって今年の7月からスタートしたプロジェクトです。藤原氏は、それまでの5年間に地震調査研究推進本部の地震動予測地図の作成に関与されており、その際に地震動予測における地盤情報の重要性、そして地盤情報を収集することの大変さを痛感され、このプロジェクトを立ち上げられたそうです。本DBは、浅いボーリングデータから深いものまで、そして日本全土に渡るデータを収集する予定とのことでした。

最後に、東京大学の榊原康貴氏より、「地理空間情報活用推進基本法案について」の講演がありました。この法案は、現在計画が進められている準天頂衛星を用いた高精度測位の実現に向けて、測位の基盤情報となる地理空間情報を公共財として位置づけるために作成されたものです。この法案が施行された場合、地理空間情報は国の責任下で品質が明示され、無償又は廉価で整備・提供される仕組みが構築されて、その窓口を地方公共団体が担当することになります。地質地盤情報も、同様の仕組みで整備・提供されることが望まれており、本法案から学ぶべき点は多いと考えられます。ちなみに本法案は既

に国会に提出されており、早ければ9月の臨時国会で成立する見込みだそうです。

講演の後には、総合討論が行われました。まず注意すべき地質地盤情報の例として、鉱山や防空壕など陥没の危険性のある廃棄地下空間の問題が取り上げられ、危険性の公開やそれに関わる問題が議論されました。特に、このような危険情報の公開と賠償請求との関係について、情報公開によって賠償請求が起きることがある一方、公開しなかったことによって賠償請求が起きることも想定されます。これに個人情報保護に関わると、さらに問題が複雑になることも議論されました。後半では、建築確認によるボーリングデータについて議論が行われました。最近では民間の建築確認機関が増えており、そのため自治体等が管理しているデータの割合は低下し、データが分散しつつあります。地質地盤情報を統合的に管理するシステム作りを早急に構築する必要があることを共通の認識として、総合討論は終わりました。

第3回の意見交換会は9月11日に行われ、学会や自治体、情報ネットワークにおけるボーリングデータの整備や公開について議論を行いました。この様子については、次号において報告される予定です。

なお地質地盤情報協議会の活動につきましては、GSJの産学官連携活動のWebページ(<http://www.gsj.jp/Sgk/>)をご参照下さい。

## 地学団体研究会つくば総会の報告

竹内 圭史 (地質情報研究部門)

2006年8月18日から21日までの4日間、産総研つくばセンターにおいて、地学団体研究会第60回つくば総会が開催されました。

地学団体研究会(略称地団研)は、地質科学系の教員やコンサルタントを主な会員とする学術団体で、会員数はこの分野では日本地質学会に次ぎ約1,800人です。総会は、5月GWに開催していた時期もありましたが近年は8月開催が通例となって、今回は静岡市清水で開催されています。総会の会場は、共用講堂が改修工事で使えない予定だったため、18日は第7事業所内の各会議室、19・20日は本部情報棟1Fの会議室・ロビーで設営されました。

やはりつくばエクスプレス開通の恩恵か、はたまたこの機会にかねて聞く「筑波研究学園都市」なるものを見れば聞かばやということだったのか、参加者は200名の予想を大きく上回り260名に達しました。そのため

資料集が売り切れて、3日目遅くに来た参加者には資料集を渡せないかわりに参加費を無料とするアクシデントもありました。



写真1: GSJのポスター展示。

総会では18～20日の3日間に、「アダカイト」「四万十帯」と「環境災害地質」2件の計4件の学術シンポジウムと、科学運動シンポジウム、学習会、ポスターセッション、夜間小集会、そして地質調査総合センター展示などが催されました。また、20日には地質標本館の見学ツアーも設定され、個人22人と1団体30人が見学しました。総会議事も定足数を余裕で満たして成立し活動方針の審議や役員を選出などが行われました。21日は3コースの地質巡検と、第7事業所のGSJ研究施設の見学が行われました。地質巡検は八溝山、筑波台地、筑波山の3コースで、いずれも例年以上の参加者を集め好評でした。

1979年の旧地質調査所の筑波移転以来、何度かつくば総会開催の話があったのですが、施設利用や交通に難がありこれまで実現しませんでした。しかし昨年のつくばエクスプレスの開通などで条件が整ったため、とうとう開催するはめに……。いえ、開催できる運びになったのでした。地団研東京支部地調班のメンバーを中心とする準備作業は、組織力を発揮してくれたおかげで思った



写真2：懇親会でのがまの油売り実演。

より順調で、各シンポジウムの企画の他、懇親会を手作りのバーベキューとするなど、ハラハラする事務局長を尻目にずんずん進められました。総会全体としてまず上首尾だったと思います。最後に、快く協力頂いた非会員のGSJ職員の方々に御礼申し上げます。

## 活断層データベース大幅改訂

伏島 祐一郎（活断層研究センター）

活断層研究センターは、2006年8月24日に、活断層データベースを大幅に改訂しました。見かけが大きく変わり、新しいデータを大量に追加しましたが、旧版のデータも引き続き検索することができます。無料でいつでもお使いいただけますので、ぜひお試しください。これまでと同じURLからアクセスしてください。

<http://www.aist.go.jp/RIODB/activefault/>

主な改訂内容を、以下に列記します：

- (1) 検索できる活動セグメントを大幅に増やしました。
- (2) 絞り込み検索ができるようになりました。
- (3) 検索結果の並べ替えができるようになりました。
- (4) 検索できるデータ項目を増やしました。
- (5) 検索結果を示す表を組み替え、増やしました。
- (6) 検索経路を追加しました。
- (7) 画面デザインを変更しました。
- (8) ユーザビリティ（使い易さ）を高めました。
- (9) アクセシビリティ（接し易さ）を高めました。

調査番号	調査地名	緯度 (北緯)	経度 (東経)	調査年度	調査方法	調査内容	調査者	公開	注記	備考
000-0023	福島沖沖断層	37°48'57"	142°25'18"	昭和三十九年	航空写真判読	新震源域調査	国土院	1985	・	
000-0018	福島-中野断層	37°48'38"	142°25'27"	昭和三十九年	航空写真判読	新震源域調査	国土院	1986-1987	・	
000-0085	利府断層	37°48'21"	142°24'52"	昭和三十九年	航空写真判読	新震源域調査	国土院		・	
000-00175	T子断層	37°48'05"	142°24'46"	昭和三十九年	航空写真判読	新震源域調査	国土院	1984-2002	・	

新しい検索結果表示画面。絞り込み検索ボックス、並べ替えボックス、活断層平面図を追加し、デザインを一新しました。

純粋なりレーショナルデータベースとして、新しい形式に再構築した事により、これらの機能強化が実現しました。しかしこれらは、主に新しい形式で追加入力したデータを対象としています。新しい形式へのデータ更新入力を、順次進めていく予定です。

## 地質調査総合センターシンポジウムのお知らせ

地質調査総合センターでは、下記の通り第6回シンポジウムを開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

### 地質調査総合センター第6回シンポジウム「地質情報の社会貢献を考える」

地質情報の有効活用が、現在注目されています。建設コンサルタント、自治体、公的機関等が保有する地質情報を、知的基盤として整備し広く活用することができれば、地震防災や建設コスト削減等に大きく貢献できると考えられます。本シンポジウムでは、このような地質情報の社会貢献について講演や展示を中心に議論します。

尚、講演後は、インターネットによる地質情報の公開についての近年進歩の著しい情報技術を利用した展示・実演を行います。

日時：2006年11月14日（火） 13:30～18:00（展示発表を含む）

場所：秋葉原コンベンションホール（秋葉原ダイビル2F）

主催：独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター・産学官連携推進部門、地質地盤情報協議会

共催：日本応用地質学会、（社）全国地質調査業協会連合会

入場：無料（定員150名 予定） ※事前登録が必要になります。登録開始は10月頃からの予定です。

お問い合わせ：地質調査総合センターシンポジウム事務局（sympo06\_gsj@m.aist.go.jp）

<http://www.gsj.jp/Event/061114sympo/index.html> もご覧ください。

### プログラム

地質調査情報協議会の活動 栗本史雄（産業技術総合研究所）

#### 特別講演

地質調査技術の将来展望 小島圭二（地圏空間研究所）

#### 講演

1. 地質情報の社会的価値—アウトカムからの視点 齋藤 眞（産業技術総合研究所）
2. コスト構造改革下での地質調査の役割—全地連「地質リスク WG」の活動報告—  
佐橋義仁（全国地質調査業協会連合会）
3. 北海道での地質情報の活用について 小澤 聡（北海道立地質研究所）
4. 建設コンサルタントの地質情報活用 尾園修治郎（株式会社建設技術研究所）

#### 総合討論

#### 展示

Web-titan, Web-GIS, シームレス地質図, 活断層データベース, GEOLIS（地質文献データベース）等のデモンストレーションを行います。

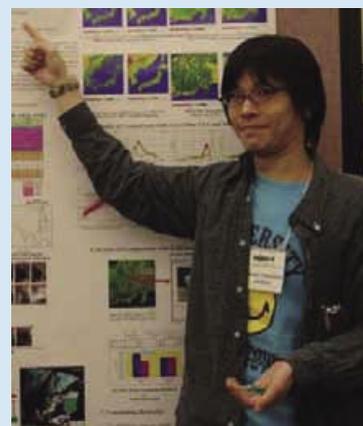
### 新人紹介 ①

## 山本 浩万

（やまもと ひろかず，グリッド研究センター）

2006年4月1日よりグリッド研究センター地球観測グリッドチームに研究テーマ型任期付研究員として採用されました山本浩万と申します。3月までは宇宙航空研究開発機構・地球観測利用推進センター（JAXA EORC）におりました。

これまでは、衛星データを用いた地植生学的マッピング、モンゴルを中心とした現地観測と衛星観測との併用による全球レベルでのバイオマスマッピングに関する研究を行っておりました。JAXAでは2002年12月に打ち上がったADEOS-II（みどり2号）搭載GLIや本年1月に打ち上がったALOS（だいち）搭載AVNIR-2、PRISMといった光学センサのデータを用いた地表面反射率や植生指数といったプロダクトの導出や評価を中心に携わっておりました。こうした現場観測と衛星データ処理の両面の経験は、今後の研究活動に大



いに生かせると考えております。特に、グリッド研究センター地球観測グリッドチームではこうしたあらゆる地球観測データの統合化をはかり、防災、温暖化にかかわる炭素循環、それに伴う気候変動などの高精度予測システムの構築を目指しています。こうした活動は、昨年京都議定書の発効、GEOS10年実施計画をみても、衛星観測データの社会還元という意味でも極めて重要な役割を果たすと考えられます。今後もこうした研究に携わっていこうと思っておりますので、宜しくお願いいたします。

## 重松 紀生

(しげまつ のりお, 地質情報研究部門)

2006年4月1日付けで地質情報研究部門地震発生機構研究グループに配属になりました重松紀生です。産総研にはこれまで、特別研究員、招聘研究員として在籍していたので、すでにご存知の方もいらっしゃると思います。このたび主任研究員として採用されましたので改めてよろしくお祈いします。

これまで、断層深部の岩石変形という観点から、内陸活断層の大地震発生過程の解明を目指してきました。これらの研究では、野外調査に根ざした構造地質学、岩石変形機構の解析という手法により研究を行ってきました。今後は、こうした手法に加え、実験室において断層深部の岩石変形を再現するなどし、包括的に断層深部の岩石の変形挙動を明らかにし、地震の発生予測精度向上につなげていく予定です。また地質情報研究部門地震地下水研究グループで展開する地震地下水観測網の観測・解析にも携わっていく予定です。



このニュースレターは、地質調査総合センターのホームページでバックナンバーを含めご覧になれます。

<http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>

## スケジュール

10月3日～11月12日	地質標本館特別展 「人類と社会の未来をつなぐ地質時代—日本の第四紀研究50年—」 (つくば市, <a href="http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2006/2006yonki/yonki.html">http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2006/2006yonki/yonki.html</a> )
10月4～5日	震災対策技術展 / 自然災害対策技術展 仙台会場 ～宮城県沖地震ならびに津波への万全の対策を!!～ (仙台市, <a href="http://www.exhibitiontech.com/etec/">http://www.exhibitiontech.com/etec/</a> )
10月14日	地質標本館普及講演会、石器製作実演会 (つくば市, <a href="http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2006/2006yonki/yonki.html">http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2006/2006yonki/yonki.html</a> )
10月20日	第3回自治体・産総研地質地盤情報連絡会 (埼玉県騎西町, <a href="http://www.gsj.jp/Sgk/index.html">http://www.gsj.jp/Sgk/index.html</a> )
10月20日	サイエンスカフェ「地下水で地震を予知する」 (つくば市, <a href="http://www.aist.go.jp/aist_j/event/ev2006/ev20061020_2/ev20061020_2.html">http://www.aist.go.jp/aist_j/event/ev2006/ev20061020_2/ev20061020_2.html</a> )
10月23～25日	日本火山学会 2006年秋季大会 (阿蘇市, <a href="http://www.aso.vgs.kyoto-u.ac.jp/kazan2006/">http://www.aso.vgs.kyoto-u.ac.jp/kazan2006/</a> )
10月31日～11月2日	日本地震学会 2006年秋季大会 (名古屋市, <a href="http://www.soc.nii.ac.jp/ssj/">http://www.soc.nii.ac.jp/ssj/</a> )
11月4～7日	第120回地球電磁気・地球惑星圏学会総会・講演会 (相模原市, <a href="http://www.stp.isas.jaxa.jp/STP/sgepss/index.html">http://www.stp.isas.jaxa.jp/STP/sgepss/index.html</a> )
11月9～11日	日本応用地質学会平成18年度研究発表会 (熊本市, <a href="http://www.soc.nii.ac.jp/jseg/r_new/committee/gyouji_box/2006/H18kenpatsu/H18kenpatsu_main.html">http://www.soc.nii.ac.jp/jseg/r_new/committee/gyouji_box/2006/H18kenpatsu/H18kenpatsu_main.html</a> )
11月13日	地質地盤情報協議会第4回意見交換会 (丸の内, <a href="http://www.gsj.jp/Sgk/index.html">http://www.gsj.jp/Sgk/index.html</a> )
11月14日	地質調査総合センター第6回シンポジウム 「地質情報の社会貢献を考える」 (秋葉原, <a href="http://www.gsj.jp/Event/061114sympo/index.html">http://www.gsj.jp/Event/061114sympo/index.html</a> )
11月20～22日	日本地熱学会 2006年学術講演会 (福島県天栄村, <a href="http://www.soc.nii.ac.jp/grsj/TENEI/tenei-html/tenei.html">http://www.soc.nii.ac.jp/grsj/TENEI/tenei-html/tenei.html</a> )
12月15日	2006年度日本情報地質学会シンポジウム 「Web-GISによる公開情報活用とその促進環境の新展開」 (秋葉原, <a href="http://www.jsgi.org/symposium2006.html">http://www.jsgi.org/symposium2006.html</a> )

## 編集後記

武藤 奈緒子  
(地質調査情報センター)

今月も、無事GSJニュースレターを発行することが出来ました。国内外の諸機関との連携活動や各種イベントの運営報告など、多岐にわたる活動をご紹介します。直接携わっていない方々にとっても、GSJの活動についての理解をより深める一助になれば幸いです。

さて、早いもので、本誌の創刊より丸2年が経過しようとしています。編集委員の顔ぶれは入れ替わってきましたが、創刊当時から携わってきた者の一人としては感慨深いものがあります。ここまで続けてこられたのも、いつも読み応えのある記事をお寄せくださる皆様のご協力あつてのことです。改めて御礼申し上げます。

今後も様々な催しが控えており、忙しくも充実した日々となりそうです。次号以降も、どうぞお楽しみに。

GSJ Newsletter No.24 2006/9

発行日：2006年 9月 28日

発行：独立行政法人 産業技術総合研究所  
地質調査総合センター

編集：独立行政法人 産業技術総合研究所  
地質調査情報センター

栗本 史雄 (編集長)

武藤 奈緒子 (編集担当)

志摩 あかね (デザイン・レイアウト)

〒305-8567

茨城県つくば市東1-1-1 中央第7

TEL: 029-861-3687

FAX: 029-861-3672

ホームページ：<http://www.gsj.jp/>